

平成27年度 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（小学校）

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における研究の取組状況を把握し、現時点の成果・効果や課題を分析した上で関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究指定校の今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における議論の参考とし、今後の施策の検討に資する。

※本事業は平成26年度より4年間実施予定

2. 調査の対象・期間

- 調査対象
英語教育強化地域拠点事業 研究指定校 113校 / 113校
- 調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
 - ①学習到達目標（例：CAN-DO形式）の設定及びそれに基づいた指導と評価（例：パフォーマンス評価）に関すること
 - ②「外国語活動型（中学年）」、「教科型（高学年）」を意識した教材開発に関すること
 - ③言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携、短時間学習（帯学習、モジュール学習）の取組状況に関すること 等

3. 主な取組状況

- (1) 研究指定校共通の取組
 - 3・4年生は活動型（週1コマ）、5・6年生は教科型（週1コマ程度）
 - 学級担任を中心とした授業を実施（一部の地域でALT（外国語指導助手）、支援員とのチーム・ティーチングを実施）
 - 学習到達目標・評価
 - ほとんどの小学校でCAN-DO形式の学習到達目標を設定。
 - そのうち、多くの小学校がパフォーマンス評価を実施。内容はインタビューやスピーチなどスピーキングの形態による評価が中心。
 - 教材開発
 - ほぼすべての小学校が「教科型」への接続を意識した中学年用「外国語活動型」教材を開発・活用。
 - そのうち、ほぼすべての小学校が3～6年生で文部科学省作成の「Hi, friends!」の枠組みを活用し、半数を超える小学校が自作教材を開発。
- (2) 研究指定校の特色ある取組
 - 言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携教育
 - 半数近くの小学校で実施。現時点では音の違い、文字表記の仕方、文構造の違いへの気づきに関する内容が主な取組。
 - 短時間学習
 - 文部科学省の新しい補助教材「Hi, friends! Plus」や市販・独自教材を活用したアルファベット文字の練習、短文作成などを実施。

4. 主な調査結果分析

(3) 言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携

- 国語教育との連携は、43.4%の小学校で実施していると回答。取組の内容は、音の違い（63.3%）、文字表記の仕方（61.2%）、文構造の違いへの気づき（44.9%）が上位。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 他教科と関連付けた学習内容を設定することによって、活動の中で**児童に積極性が見られた。**

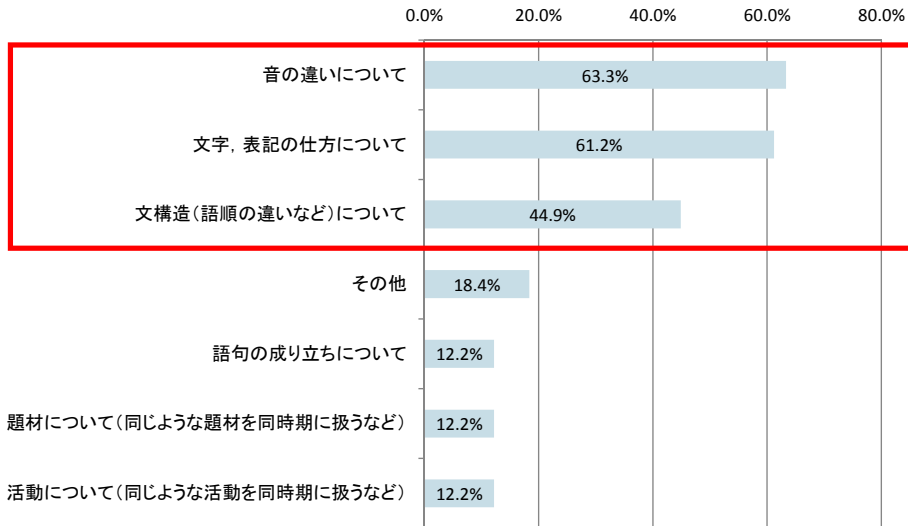
〈課題〉

- ローマ字習得の時期とアルファベット導入の時期の関係や、発音とつづりの関係を扱うかどうか、また扱う場合はどの段階で行うのかなど、**児童の様子を見ながら更に具体的に検討する必要がある。**

言語能力を効果的に高めるための国語教育との連携

1. 43.4%の小学校が国語教育との連携を図った指導をしている
2. そのうち63.3%が「音の違いについて」、61.2%が「文字、表記の仕方について」、44.9%が「文構造について」の取組をしている

Q.「国語教育と連携している」と回答した場合、具体的にどのような取組を行っているか



〈その他の内容〉

- ・国語の授業で学習した物語等の英語の絵本を購入し、教材として使用したり、英語の絵本コーナーを設置して、休み時間や放課後に自由に読むことができるようにしている。
- ・考えを伝え合う活動(話し合い活動)に重点を置き取り組み、関連を図っている。
- ・英語の音声をたくさん聞かせることで、音の違いに気付くような指導をしている。
- ・教師の方から文法的な教授はしていないが、音声が入っている児童が文字を目にすることで、アルファベット表記と単語の綴りの違い、単語と単語の間のスペース、ピリオド、複数形、三単元等の表記に気付くような指導を行っている。
- ・アルファベットの聞き取りを行い、記したものが単語になっていることに気付かせ、音と綴りの関係を体感できるように行っている。
- ・外来語とその元となった英単語の音の違いについて、ALTIに発音してもらいその違いについて学習した。等

平成27年度 英語教育強化地域拠点における小学校英語教科化に向けた教材活用に係る取組状況に関するアンケート結果の概要 (H27.10)

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における小学校英語の教科化に向けた指導・活動・教材に関する現時点の研究の現状、成果・効果、課題を把握した結果について、①関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究指定校の今後の研究の充実に活用するとともに、②次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における今後の方向性の検討に活用する。

2. 調査の対象・期間

- 調査対象
平成27年度 英語教育強化地域拠点における研究指定校(113校)における本年4月以降の取組
- アンケート調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
教科化に向けた各指導における教材(テキスト・デジタル教材・ワークシート等)の活用状況、成果・効果、課題

3. 主な調査結果

多くの学校において、Hi, friends! 2(デジタル教材含む)の枠組みを基本としつつ、新たな補助教材(Hi, friends! Plus(デジタル教材含む)及び市販・独自教材を一体的に工夫して活用した指導を実施。

(1) アルファベットの文字の認識を深める指導について

- ・ほとんどの小学校が、アルファベットの文字の認識が深まっていると回答。ただし、アルファベットの文字を認識することについては、児童の個人差が出てきているという指摘がある。
- ・指導に当たっては、Hi, friends!児童用テキストを75.2%、Hi, friends!デジタル教材を74.3%の小学校で活用しつつ、文字を書く指導において新たな補助教材も活用。

(2) 単語の認識を深める指導について

- ・小学校によって取組には差があるが、取り組んでいる学校では、3文字程度の短い単語や身近な単語に見慣れ、自ら読もうとする態度が見られると回答。その一方で、児童に個人差があるとの指摘がある。
- ・「単語に見慣れる」指導に当たっては、Hi, friends!児童用テキストを59.3%の小学校で、「単語をなぞる」指導に当たっては、補助教材ワークシートを52.2%の小学校で、「単語を読む」指導に当たっては、カードやワークシートなどの独自教材を40.7%の小学校で活用。

(3) 国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す指導について

- ・多くの小学校で、児童が国語と英語の音声の違いについて気付き、また、英語らしい発音を心がけようとする児童もいると回答。その一方で、表記の仕方等の特徴への気付きを促す段階にない学校もあった。
- ・「音の違いに気付く」指導に当たっては、Hi, friends!デジタル教材を49.6%の小学校で、「単語と単語の間にスペースを置くことに気付く」指導においては、ワークシート等の独自教材を31.9%の小学校で活用。

(4) 国語と英語の語順の違いなど文構造への気付きを促す指導について

- ・多くの小学校が、国語と英語の語順の違いなど文構造への気付きについては今後指導する予定。(各教材の活用状況が16%を下回っている)。

※本年度4月に新たな補助教材が配布され、調査実施時期には文構造の指導が行われていない段階であり、引き続き、取組後の研究・調査・分析を行う必要がある。

4. 教科化に向けた教材の活用状況、成果・効果、今後の課題

「英語教育のあり方に関する有識者会議」報告(平成26年9月)では、**教科化に向けた新たな指導の3つの方向性を提示**。今回は、その3つの方向性を中心に、**教材の活用状況及び、成果・効果、今後の課題を考察**。多くの学校が現在のHi, friends!の基本枠組みを活用しつつ、**新たな指導内容については文科省において作成、今年4月に配布された新たな補助教材(Hi, friends! Plus)、及び市販・独自教材を一体的に活用**。

① アルファベットの文字の認識について

- ・多くの学校で主に文部科学省作成の新たな補助教材を活用し、多くの児童がアルファベットの文字を読んだり書いたりすることを通して認識が深まっていると回答。
- ・このことから、アルファベットの文字の認識を深めることのねらいや、そのための補助教材は、高学年児童の発達段階に適していると推察。

② 国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付を促すことについて

- ・取り組んだ学校では、主に文科省の補助教材を活用し、児童が音声の違いに気付いたりしている。
- ・また、単語の認識を深めることについても、取り組んだ学校では、主に文部科学省の教材を活用し、児童が単語を読もうとする意欲・態度、姿が見られるなど回答。
- ・一方で単語の認識を深めることについては、児童に差が見られるという報告もあることから、今後、段階を追った単語の認識を深める在り方について更に具体的な検討が必要。

③ 語順の違いなど文構造への気付きを促すことについて

- ・年度途中の現時点では、多くの小学校で取り組みを実施しておらず数例の報告あり。どの段階で、語順の違いなど文構造への気付きを促すか、どの程度まで促すかなど今後、更に検討が必要。

(参考)英語教育強化地域拠点事業における小学校外国語教育の早期化・教科化に向けた研究開発各校の取り組み状況・予定
小学校3・4年生

H26年度

- ・年間35単位時間「活動型」
- ・「Hi, friends! 1」を活用
- ・目標・指導内容検討

H27年度

- ・年間35単位時間
- ・「Hi, friends! 1」を活用しつつ、独自教材作成・活用
- ・年間指導計画作成

H28年度

- ・「Hi, friends! 1」、独自教材活用
- ・目標・内容・指導計画の見直し

H29年度

- ・教材の効果的活用・事例集作成
- ・目標・内容・指導計画の検証
- ・教育課程編成研究最終報告、研究成果総括

小学校5・6年生

H26年度

- ・年間35単位時間「活動型」(5年生)、35単位時間「教科型」(6年生)
- ・「Hi, friends! 1」及び「Hi, friends! 2」を活用
- ・目標設定、指導計画作成

H27年度

- ・年間70単位時間「教科型」(5, 6年生)
- ・「Hi, friends! 2」を基本枠組みとしつつ、「Hi, friends! Plus」、独自教材作成、市販教材も活用
- ・文字・単語の認識(「読む」、「書く」)など
- ・年間指導計画作成

H28年度

- ・「Hi, friends! 2」、
- ・「Hi, friends! Plus」、独自教材を活用
- ・「読む」「書く」の指導方法開発
- ・目標・内容・指導計画の見直し

H29年度

- ・独自教材の検証
- ・「読む」「書く」の指導方法研究
- ・中学校との接続の在り方を研究
- ・評価の研究・検証
- ・教育課程編成研究最終報告、研究成果総括

指導内容における教材の活用状況及び成果と課題

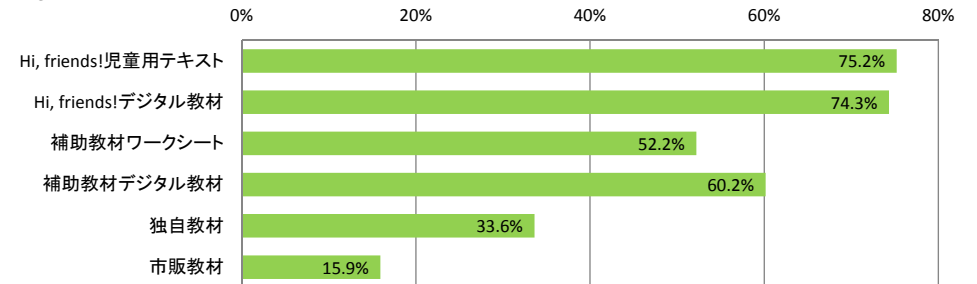
「英語教育のあり方に関する有識者会議」報告では、教科化に向けた補助教材作成において3つのポイントが示された。そこで、ここでは、その3つのポイントについて、本調査結果から教材の活用状況及びその成果と課題を考察する。

アルファベットの文字の認識については、多くの小学校で主に文部科学省作成の教材を活用し、多くの児童がアルファベットを読んだり、書いたりすることを通して、深まっていることから、アルファベットの文字の認識を深めることや、そのための教材は、高学年児童の発達段階に合っていると思われる。**国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付を促すことについては、取り組んだ学校では、主に文部科学省の教材を活用し、児童が音声の違いに気付いたりしている。また、単語の認識を深めることについても、取り組んだ学校では、主に文部科学省の教材を活用し、児童が単語を読もうとする姿が見られるなどしている。しかし、一方で単語の認識を深めることについては、児童に差が見られるという報告もあることから、今後、段階を追った単語の認識を深める在り方を検討する必要がある。語順の違いなど文構造への気付きを促すことについては、多くの小学校で取り組みを実施していない状況にある。どの段階で、語順の違いなど文構造への気付きを促すか、どの程度まで促すかなど今後検討が必要である。**

(1) アルファベットの文字の認識を深める指導について

- アルファベットの発音(読み方)は、外国語活動において扱われていたことから、すべての小学校において児童が取り組み、そのことがアルファベットの読み方と文字の一致につながっている。その際には、Hi, friends!児童用テキスト、Hi, friends!デジタル教材の活用がそれぞれ、75.2%、74.3%であり、Hi, friends!がベースとなっていることが分かる。

Q. アルファベットの発音をする指導で、どのような教材を活用しましたか。(複数回答)

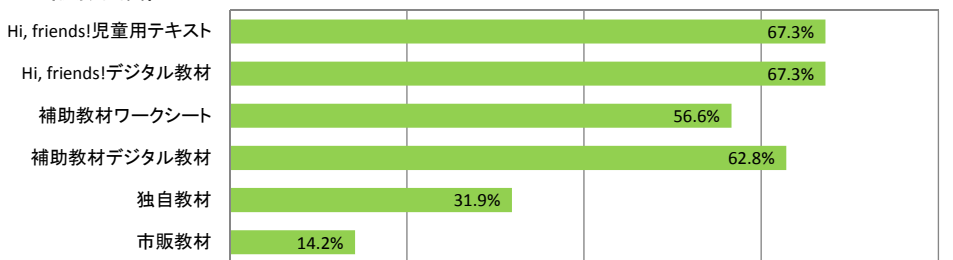


《成果(◇)と課題(△)》

- ◇ 音声指導と併せた書く活動が有効であった。
- ◇ 視覚的に捉えることができるので、児童の反応がよい。
- △ ジングルの活用の際、補助教材デジタル教材に文字が入っていないので、文字のあるワークシートを指しながら指導した。

- アルファベットの文字と読み方を一致させることは、外国語活動でも扱われていたことから、すべての小学校で児童が取り組み、多くの児童が意欲的に取り組んだ。教材については、Hi, friends!児童用テキスト(67.3%)、Hi, friends!デジタル教材(67.3%)に次いで、補助教材デジタル教材(62.8%)が活用されており、Hi, friends!がベースとなっていることが分かる。

Q. アルファベットの文字と読み方を一致させる指導で、どのような教材を活用しましたか。(複数回答)

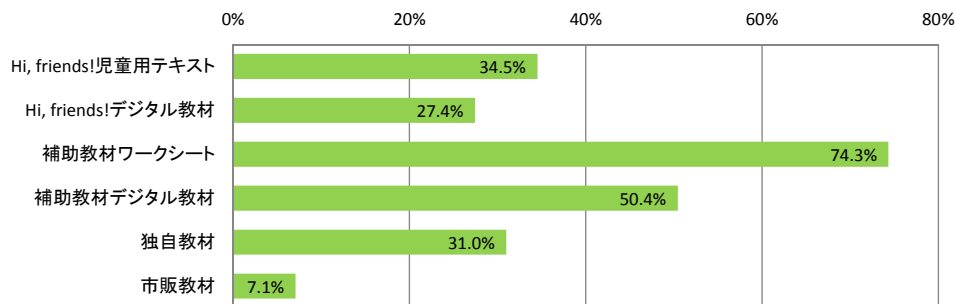


《成果(◇)と課題(△)》

- ◇ 補助教材デジタル教材の文字当てパズル等を活用すると、意欲的に文字の特徴を認識することができた。
- ◇ 補助教材ワークシートでアルファベットをなぞりながら発音する活動が効果的であった。
- △ イラストと文字を意識させるために、テキストやカード等に文字も示されるとよい。

- アルファベットの文字を書く取り組みは、ほぼ全小学校で取り組んでいる。1単位時間の中で短時間をかけて数文字を扱ったり、繰り返し学習したことで、児童が読み方と文字とを一致させることができつつある。教材としては、補助教材ワークシートが主に活用され(74.3%)、アルファベットの文字の認識の指導では、Hi, friends!の教材がベースとなっていることが分かる。

Q. アルファベットの発文字を書く指導で、どのような教材を活用しましたか。(複数回答)



《成果(◇)と課題(△)》

- ◇ 補助教材ワークシートで文字をなぞったり書いたりする活動を繰り返し行うことで理解を深めた。
- ◇ 補助教材デジタル教材で色が変わる書き順を見ることで、アルファベットを書いたりなぞったりすることに慣れ、短時間で書けるようになってきた。
- △ 大文字の認識は容易であるが、小文字の認識には、4線を活用して繰り返し書く活動が必要である。

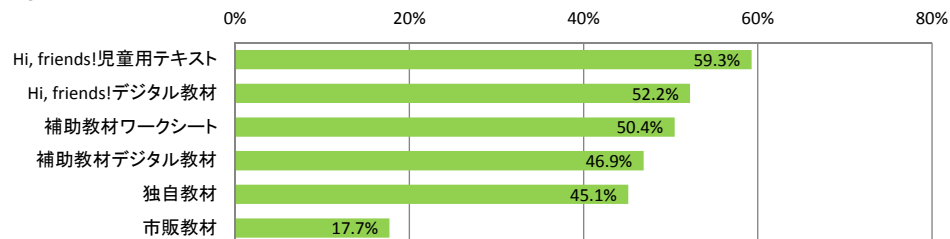
その他の指導内容における教材の活用状況の事例

- 本時で学習したアルファベットについて、授業の終末でその文字の特徴を児童一人一人が体で表現する取組を行った。友達の身体表現を見合う中で、アルファベットの形の認識を深めることができた。(111光華小)
- 教育委員会が作成したワークシートや独自のワークシートなど、様々な教材を活用して、なぞり書きをしたり写し書きをしたりする活動を、段階的に繰り返し行い、アルファベットの文字のへの認識を深めることができた。(16群馬県沼田市立沼田東小)
- 児童一人一人にホワイトボードを配り、「何度も書く」「とにかく書く」「言いながら書く」ことをねらって、ゲームを取り入れながら書く活動を行っている。新しいアルファベットとの出会いの際は、フラッシュカードを利用するなどしながら、まずは文字として認識するのではなく、音と形としての認識させることによって、正しい文字への学習につなげるための意欲付けになっている。(48山梨県南アルプス市立白根飯野小)
- アルファベットの文字と音の関係についての認識を深めることで、ローマ字との違いに気付くことができた。また、英語の単語の綴りや発音への気付きにつながる活動となった。(64京都府宇治市立宇治小)

(2) 単語の認識を深める指導について

- ほとんどの小学校で、文字を添えた絵カード等を活用することで、児童が単語に見慣れるようになってきており、単語に興味を持ったり、3文字程度の単語であれば読もうとする児童もいる。一方で、時間をかけて指導する必要がある、個人差も出てきているという指摘もある。教材としては、Hi, friends!児童用テキスト(59.3%)、Hi, friends!デジタル教材(52.2%)のほか、独自教材(45.1%)も活用されている。

Q. 単語に見慣れる指導で、どのような教材を活用しましたか。(複数回答)

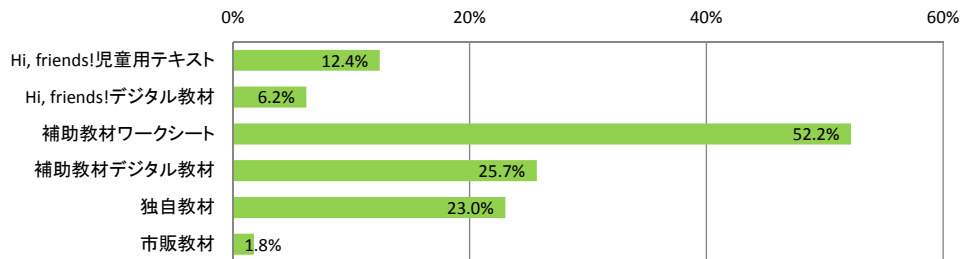


《成果(◇)と課題(△)》

- ◇ ピクチャーカードやHi, friends!デジタル教材に文字があることで、自然と文字に慣れ親しみ、単語の認識に効果的であった。
- ◇ 単語の中の抜けている音を探しながら学習する活動は、単語の綴りに興味を持ち、イラストを見ただけで、単語を発音できる児童が増えた。
- △ ピクチャーカードや補助教材ワークシートで扱う単語には、児童が生活の中でのなじみのあるものを多く取り扱う必要がある。

- ほとんどの小学校で取り組まれており、単語をなぞることで単語に見慣れ、児童の単語を読もうとしたり、単語を読みたいという思いにつながっている。補助教材ワークシートが52.2%活用されているが、児童が楽しく飽きないような様々な活動と組み合わせることで、ドリルになってしまわないよう配慮が必要である。

Q. 単語をなぞる指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

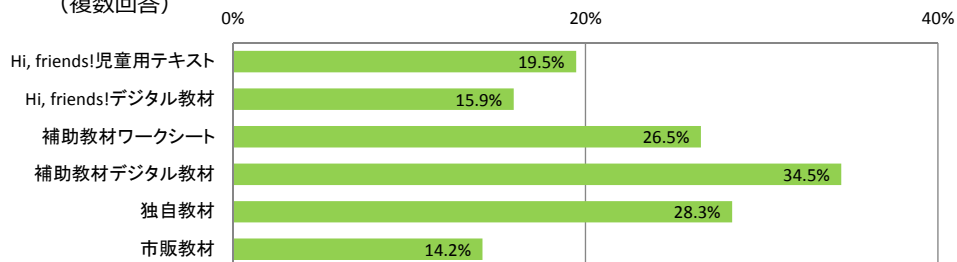


《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ 単語を繰り返しなぞることで、単語が文字のまとまりであることへの理解が深まった。
- ◇ 単語を書くときの文字の位置などを正しく知り、正しく書くことを進める上で、補助教材ワークシートのなぞり書きは有効であった。
- △ 単語をなぞることはできたが、4線以上に単語を書くことができない児童も見られた。

- 文字を添えられた絵カードや補助教材デジタル教材等を活用しながら（34.5%）、単語をなぞる活動等も通して、児童が自然に発音と綴りの関係に気付いたりする学校がいくらかある一方で、積極的に発音と綴りの関係を扱ったDVD等の独自教材（28.3%）、市販教材（14.2%）を通して指導している学校もある。

Q. 英語において発音と綴りの関係を知る指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

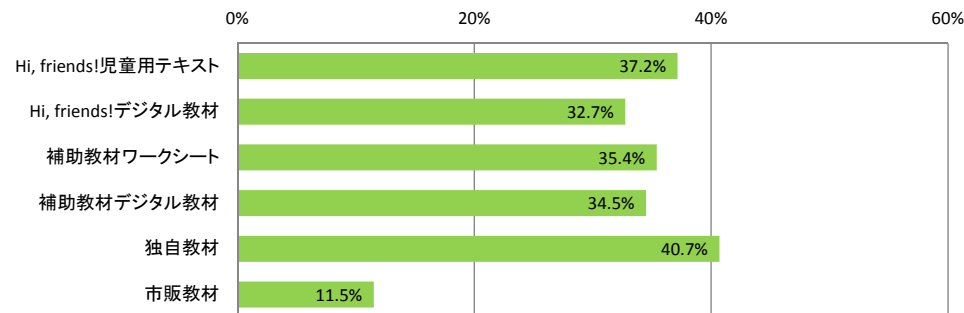


《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ 補助教材デジタル教材を活用することで、アルファベットの読み方を学びながら、単語がアルファベットの音のつながりであることに気付くことができた。
- ◇ 自作教材では、文字をなぞりながら発音することを通して、発音と綴りの認識を深めることができた。
- △ Hi, friends!デジタル教材や補助教材デジタル教材では、発音と綴りの認識を更に深めるために、歌や会話の画面に発音と同時に文字も表示するとよい。

- 多くの小学校で、独自教材（40.7%）や、Hi, friends!児童用テキスト（37.2%）等を活用して児童が発音とつづりの関係に興味をもち、単語を読もうとする姿が見られる一方で、市販教材（11.5%）等を活用して発音とつづりの関係を指導する学校も見られる。

Q. 単語を読む指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）



《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ 短時間学習等で、ピックアップカードやダイアログなど、いつも単語を意識して示すことで、文字を読もうとする意識が高まった。
- ◇ 補助教材のピックアップカード作成機能が効果的であった。3種類のカード作りにおいて導入から徐々に文字の大きさを変えて使用することにより、単語の綴りへの理解が深まった。
- △ 児童にピックアップカード等を示す際は、綴りの難易度等を踏まえ、段階的に指導していく必要がある。

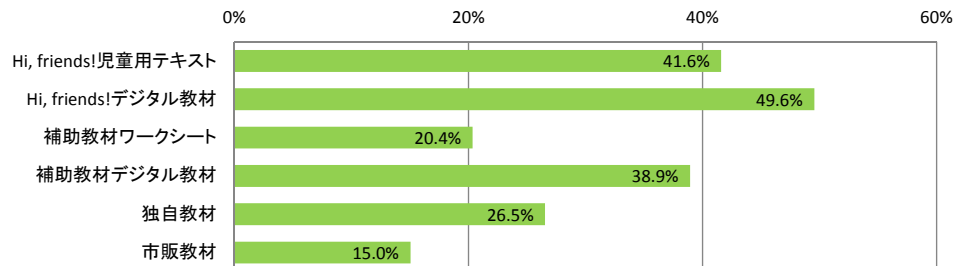
その他の指導内容における教材の活用状況の事例

- 児童が作成したカード等を使って、英語系の児童を中心に授業の終末で、キーワードゲームやミッシングゲームに取り組んだ。児童は、楽しみながら単語の認識を深めることができた。（111光華小）
- 発達段階に応じて、低学年から英語絵本の読み聞かせを行った。中学年や高学年では授業の中でも取り扱った。導入時には、ねらいに沿った簡単な内容の絵本を読み聞かせることで意欲付けにつながった。展開時には、本時で扱う単語や動詞が多く出てくる内容の本を読み聞かせることで認識を深めることにつながった。終末時には、学習内容により親しみをもたらすような内容の本を読み聞かせることで、学習の振り返りと次時への意欲付けにつながった。（62京都府南丹市立殿田小）
- 児童一人一人が手に取るできるように和英辞典を準備することで、児童は授業の中で分からない単語などを調べ、自己表現の単元で効果的に活用している。また、休憩時間等にも和英辞典を手に取る児童が増え、英語に対しての関心・意欲が高まっている。（18-20埼玉県鴻巣市3校）

(3)国語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きを促す指導について

- 音の違いへの気付きについては、取り組んでいない地域や学校があったり、その取組に差があったりする。Hi, friends!デジタル教材（49.6%）、Hi, friends!児童用テキスト（41.6%）が活用されており、デジタル教材やALTの音声から、児童が国語と英語の音声の違いに気付いていることが多い。

Q. 音の違いに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

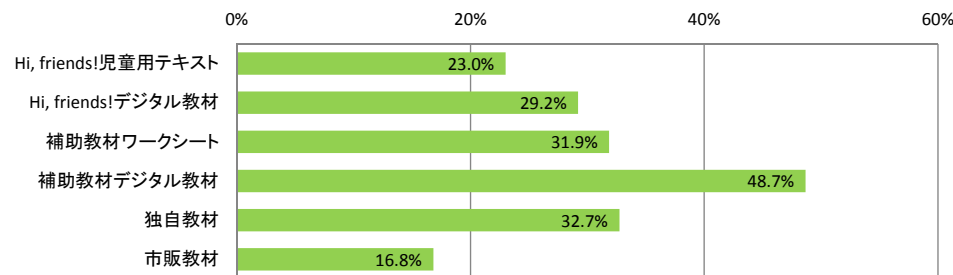


《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ Hi, friends!児童用テキストやHi, friends!デジタル教材等、独自教材等でカードなどを効果的に活用することで、身近な外来語と英語の発音の違いに気付くことができた。
- ◇ Hi, friends!デジタル教材や補助教材デジタル教材等の音声教材を活用することで、日本語と英語のアクセントや音の違いを意識して聞き分けることができるようになった。
- △ 中学年では、音の違いについて英語らしく聞こえたとおりに発音してみようとする児童が多いが、高学年になると、聞こえたままという曖昧さに耐えにくいのか、単語などにカタカナ表記をするなど、カタカナ英語で発音する児童も見られた。

- 多くの小学校で、アルファベットには読み方と音があることに気付く活動に取り組み、補助教材デジタル教材に収録されているアルファベットジングルを活用してアルファベットの音に慣れ親しませていることが多い（48.7%）。

Q. アルファベットには読み方と音があることに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

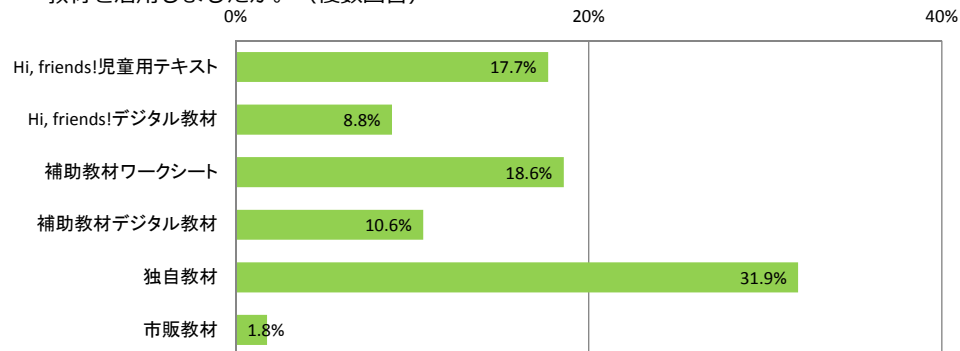


《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ 補助教材デジタル教材では、視覚的に得た情報と音声を関連させて繰り返し取り組むことで、単語に合わせてアルファベットの読み方や音についての認識を深めることができた。
- ◇ 補助教材デジタル教材では、児童自身の操作で到達度に応じて速さを替えて学習することができ、各自で発音しながら意欲的に取り組むことができた。
- △ アルファベットの読み方と音の違いの理解が困難な児童もおり、より効果的な指導の工夫を検討していく必要がある。

- 英文を書く際には、単語と単語の間にスペースを置くことに気付く活動については、半数程度の学校が取り組み、独自教材を活用している場合が多い（31.9%）。

Q. 英文を書く際には、単語と単語の間にスペースを置くことに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）

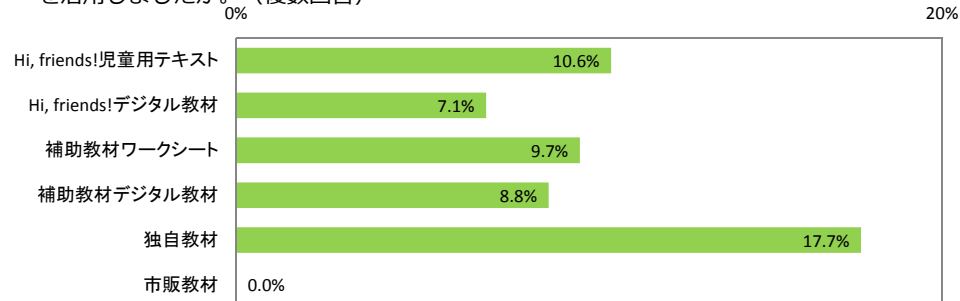


《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ 独自の教材において単語や文を書き写す活動を開発し、ワークシート等に正確に書き写す活動を繰り返すことによりスペースに気付き、意識して書くことができるようになった。
- △ 補助教材ワークシートや補助教材デジタル教材にも、英文を書く際のスペースに気付かせる工夫を掲載する必要がある。

- 国語と英語では、句読点やその打ち方に違いがあることに気付く活動については、半数程度の学校が取り組み、独自教材を活用していることが多い（17.7%）。

Q. 国語と英語では、句読点やその打ち方に違いがあることに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。（複数回答）



《成果（◇）と課題（△）》

- ◇ 国語で扱う文章と英語の文章を比較させることで、句読点などに着目し、その違いや特徴について気付くことができた。
- ◇ 文部科学省作成の教材で取り扱う内容に加えて、句読点等を多く使う内容の教材を独自に開発し、テキストやワークシートを工夫して、句読点等に対する意識を高めた。
- △ ワークシートやデジタル教材において、句読点等に関する内容の掲載を増やす必要がある。

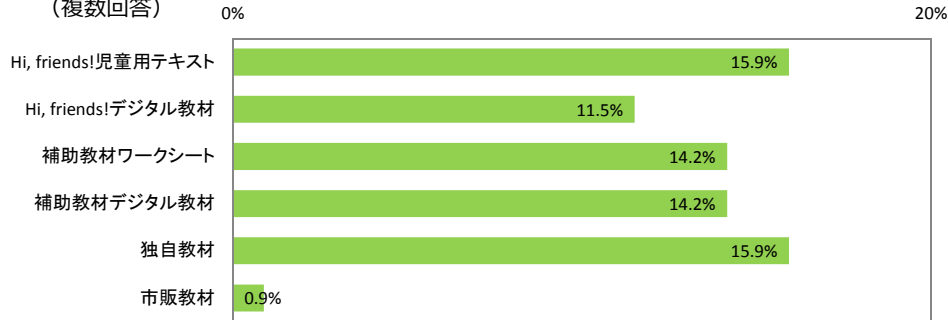
その他の指導内容における教材の活用状況の事例

- 日本語と英語の音の違いが意識できるチャンツを活用して、繰り返し取り組むことで単語等を言い慣れさせることができた。
- フォニックスを扱ったDVDを活用して、英語の特徴的な音に気付かせ、繰り返し取り組ませることで、理解を深めさせることができた。

(4)国語と英語の語順の違いなどの文構造への気付きを促す指導について

- 国語と英語では語順が違うことに気付く活動に取り組むに至っている学校は多くないが、取り組んでいる学校では、15.9%がHi, friends!児童用テキストと独自教材を活用し、児童に気付きを促している。

Q. 国語と英語では語順が違うことに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。
(複数回答)

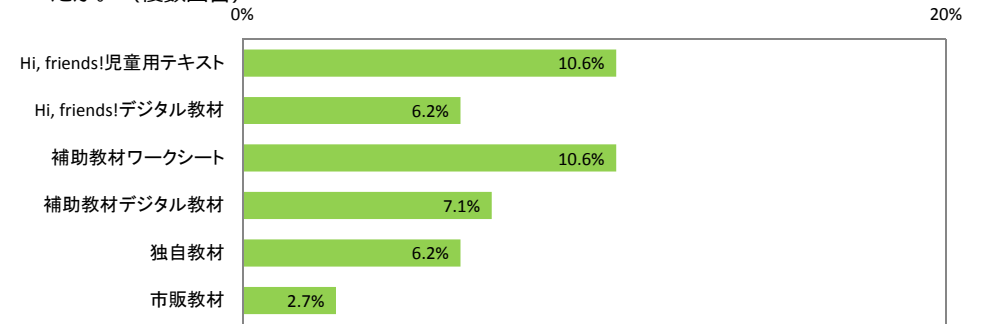


《成果(◇)と課題(△)》

- ◇ Hi, friends!児童用テキストに掲載されているなじみのある物語の挿絵を使って、語順への気付きを促すことができた。
- ◇ 絵本や独自で開発した文章を取り入れた教材を作成し、単語カード等を活用することにより、語順への気付きを高めることができた。
- △ 英語は日本語と異なる語順であることから、混乱する児童も見られるため、系統的な指導の在り方について検討する必要がある。

- 英語では、語順によって意味が決まることに気付く活動に取り組んでいる学校は少なく、取り組んでいる学校の10.6%がHi, friends!児童用テキストや補助教材ワークシートを活用し気付きを促している。

Q. 英語では、語順によって意味が決まることに気付く指導で、どのような教材を活用しましたか。(複数回答)



《成果(◇)と課題(△)》

- ◇ 文の意味に気付かせる際、テキストやワークシートを活用して、日本語と英語では、文頭や文末などのどの部分に着目するかについて、同じ意味の文を比較させることで、気付きを高めることができた。
- △ 文構造への気付きは、国語と英語の指導の連携が大切であるため、系統的な指導の在り方を整理し、統合的に教育課程を編成することが必要である。

その他の指導内容における教材の活用状況の事例

- スポーツの単語の学習を行った際に、ALTから様々なスポーツをする話を聞く中で「play」や「do」が付くスポーツ、スポーツの名前だけで表すものに気付く、その気付きからどのようなルールがあるのかということを考えさせた。このような活動を行うことで、文構造の違いに気付きを促すことができた。(111光華小)
- 日本語によるなじみのある絵本の英語版を読み聞かせることにより、ストーリーが分かっているため、主語と目的語の語順の違いに気付かせることが容易であった。(23千葉県流山市立南流山小)

独自教材例

- Hi, friends!に準拠したピクチャーカード
- アルファベットかるた
- フラッシュカード
- ねらいに沿ったワークシート
- デジタル教材 等

市販教材例

- アルファベットの敷き
- チャンツ
- ワークシート
- イラスト・ピクチャー・アルファベットカード
- デジタル教材
- モジュール授業を扱ったDVD
- フォニックスを扱ったDVD
- 音楽・チャンツ・会話を扱ったCD 等

4. 成果・効果

- ・文部科学省作成の補助教材については、ねらいに応じた活用により、児童の興味・関心を高め、意欲を継続させることに役立っている。
- ・各種カードについては、繰り返し活用することにより、アルファベットや単語の認識を深めさせることにも効果的である。
- ・補助教材ワークシートについては、理解と定着を図るための短時間学習等にも効果的である。
- ・Hi, friends!デジタル教材や補助教材デジタル教材については、聞き取りや発音の学習に役立ち、国語と英語の音声の違いなどに気付かせることにも効果的である。
- ・文部科学省作成の補助教材を参考にし、各学校の実態に応じたカードやワークシートを作成して活用している学校が多数ある。

5. 今後の課題

- ・アルファベットの文字の認識を深める指導においては、デジタル教材やワークシートの段階的な活用の仕方について検討する必要がある。
- ・単語の認識を深める指導においては、音と表記の関係に気付かせ、段階的に語数を増やしていくための指導の在り方や補助教材の活用方法について検討する必要がある。
- ・カタカナやローマ字と英語の表記や発音の違いなどに気付かせるため、デジタル教材やワークシートなどを連動させながらの指導の在り方や、補助教材の活用方法について検討する必要がある。
- ・国語と英語の語順の違いなど文構造への気付きを促すため、なじみのある絵本などを活用したり、単語カードの並べ替えをしたりするなどの活動を工夫する必要がある。
- ・以上の課題を踏まえて、いつ、どのように、どのような基準による評価を行うかについても検討する必要がある。

6. 特色ある取組

※別紙を参照。

- 教科化に向けた「読む」・「書く」にも重点をおいた取組について
島根県雲南市立吉田小学校・田井小学校
- 短時間学習の取組について
秋田県利本荘市由利立小学校、山形県鶴岡市立朝陽第五小学校、京都府光華小学校、徳島県立阿波市立伊沢小学校
- 言語能力を高めるための国語教育との関連を意識した取組について
京都市立宇治小学校
- 絵本を活用した取組について
千葉県流山市立南流山小学校